



もくじ

展示紹介

浮世絵で富士山を眺めるー江の島から・東海道からー	P 1
描かれた富士山の神秘と信仰	P 2、P 3
広重の張交絵でみる東海道	P 4
二代目オニカゲ学芸員のページ	P 5
浮世絵こぼれ話／うきよ場なれ／編集後記	P 6

浮世絵で富士山を眺める

ー江の島から・東海道からー

会期 2020年9月12日(土)～10月25日(日)



鳥居清長「江之嶋」



葛飾北斎「東海道五十三次 七 藤沢」



歌川広重「五十三次名所図会 七 藤沢」

世界文化遺産である富士山は、浮世絵のみならず日本の絵画や装飾においても最も描かれた対象ではないでしょうか。富士山の姿は、日本人の原風景と表現されることも多いですが、今日では、外国から訪れる人々にとっても日本の印象を代表する風景として認知されています。日本の観光シンボルといえる富士山は、一方では古来より信仰の対象として人々に崇敬される存在でもありました。江戸時代中期には参詣としての富士登山が一大ブームとなり、組織による参詣を企画し、各地で参詣客を補助する役割の「講」が生まれ、お伊勢参りなどとともに隆盛を極めました。

本展では、藤沢市が所蔵する江の島や東海道とともに富士山を描いた浮世絵から、浮世絵師の様々な視点や表現様式の作品を選出し展示しています。江戸時代から現代へと至るまで愛され続ける富士山の容姿と、その威容の中にある美しさや神秘性を感じていただければ幸いです。

描かれた富士山の神秘と信仰

富士山は古来より絵巻や屏風絵などに多く描かれてきました。浮世絵の世界では、街道を彩る名所の一つとして、また各地の名所の背景として用いられるなど、さまざまに描かれています。江の島を題材とした浮世絵によく見られる富士山と江の島のツーショットもその一つで、葛飾北斎の「東海道五十三次 七 藤沢」(表紙中央図)や歌川広重の「五十三次名所図会 七 藤沢」(表紙右図)などが挙げられます。

現在でも列車の車窓から見える富士山は大人気ですが、江戸時代にも旅人にとって富士山の存在は格別なものがあつたようで、いくつもの旅日記に富士山を見た時の感動がつづられています。江戸後期に信濃国の善光寺へ旅をした商家の女性の旅日記「善光寺道中記」には、八王子から日光街道に入ったところの拝島(現在の東京都昭島市)の箇所「此処(このところ)より富士山よく見ゆる」と記されていて、白く輝く富士山が描かれています(図1)。江戸後期に制作された「東海道五十三次図屏風」でも、他を圧する別格として大きく描かれています(図2)。



図1 湯沢屋むつ筆「善光寺道中記」天保11年(1840)

旅日記の発端は米沢(山形県)。江戸を經由して東海道から江の島へ周り、善光寺を目指す旅程です。右頁の始めに「藤沢」とあり、丁子(長後)ー鶴間ー町田のルートで八王子ー本庄(埼玉県)へと向かっています。



図2 作者不詳「東海道五十三次図屏風」江戸後期

雲に仕切られた各宿場等が描かれています。ここが藤沢宿です。右上の矢印は江戸城です。

一方、信仰の対象としての富士山は、江戸中期における富士講としての参詣が盛んとなります。有名な葛飾北斎の「富嶽三十六景」も、爆発的な富士講ブームがきっかけといわれています。

富士山で修業を行った長谷川角行(1541頃～1646頃)は、富士講の人々からは信仰上の開祖とされています。角行は、富士の人穴(富士宮市)などで苦行を重ねることで宗教的な感得を授かり、祈禱の力によって病氣平癒を行い、庶民を救済したといわれています。その教えは、弟子の村上光清や食行身禄などが受け継ぎ、富士講が形成されると御師や先達の活躍により、ますます盛んとなりました。

図3は江戸を含めた関東域を対象に、富士山からその周辺を一望するように描いた鳥瞰図で、沿道の名所も記されています。作者の歌川貞秀(玉蘭齋)は鳥瞰図を得意とした絵師です。

図4は富士の火口を真上から描いた作品。火口部分にはもう一枚の紙が折り込まれていて、引っ張ると立体的に立ち上がります。また、長方形のフタ状の紙が貼られた部分もあり、これをめくると洞穴の内部を巡る人々が描かれています。これらの洞穴は富士山の溶岩が流れくたる際に樹木を取り込んで固化し出来たもので、その空間の形態が人間の内臓をくり抜いた胎内に似ているため、「胎内巡り」と称して洞内を巡る信仰行為が行われるようになったといわれています。こうした大きな作品が販売されていることから、当時の富士山ブームがいかに盛んなものであったかがうかがわれます。

図5は「胎内巡り」の模様を描いた作品です。壁の隙間から覗き込むように描いて、白装束の参詣者がひしめいている様子をリアルに表現しています。

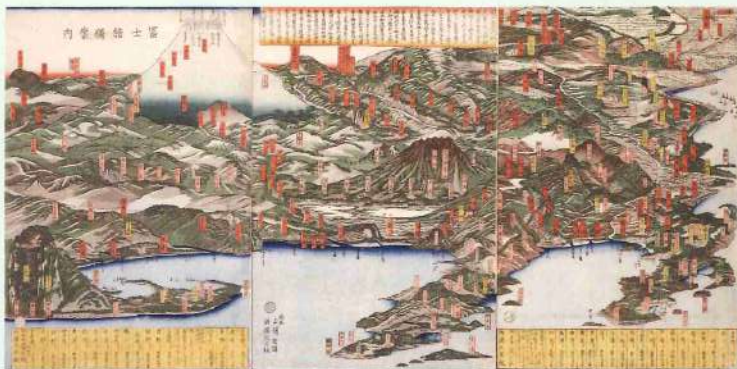


図3 歌川貞秀「富士詣独案内」



図4 歌川貞秀「富士山真景全図」



図5 歌川貞秀「富士山胎内巡之図」

広重の張交絵でみる

東海道

東海道にちなんだ様々な名所絵シリーズは数多く流通していましたが、その中でも変わり種である「東海道五十三次図会」(通称「東海道張交図会」)を紹介します。「張交」とは、一枚の紙に、大きさの異なる枠を複数組み合わせさせた手法です。屏風にもよく用いられ、書面や扇面を直接張り合わせているものも多いです。この「東海道張交図会」は一枚につき3~5宿が描かれており、その土地の名所や風景だけでなく、ゆかりのある人物や説話も含まれています。



歌川広重「東海道五十三次図会」



川崎 部分図

◀「川崎」は、縦長の画面いっぱいに慶安元年(1648)に行われた川崎大師河原酒合戦の様子が描かれています。酒合戦とは、複数の人間が飲む酒の量を競い合うもので、いわば酔っ払いによる、酔っ払いのための戦いです。この合戦は江戸方17名と川崎方15名で行われました。江戸方大将の地黄坊樽次は、腰を据えて飲めば優に一斗五升(およそ30リットル)は飲んだとされる大酒飲み。一方、川崎方大将の大蛇丸底深は、69歳の老武者でありながら、川崎大師河原村の住人で形成されたチームを上手くまとめあげ、戦いに勝利しました。実際に、酒合戦が行われた例は他にも幾つかあり、この川崎大師河原の酒合戦も文献上に残っています。

▶「神奈川」には、玉手箱を開けた浦島太郎が描かれています。煙が立ち上り、浦島太郎の顔半分が老人へと変化する瞬間です。神奈川宿には「浦島寺」と呼ばれていた観福寿寺があり、この寺には浦島太郎のものと伝わる玉手箱や釣り竿が納められていたようですが、明治元年(1868)に神奈川宿の大火で焼失してしまいました。現在も残る浦島観音像は類焼を免れて、明治6年(1874)に慶運寺(横浜市神奈川区)へ移されたといわれています。浦島伝説は日本各地にあり、神奈川にも伝わっています。



神奈川 部分図



水口 部分図

◀「水口」には、女性がひょいと巨大な石を持ち上げる場面が描かれています。女性の正体は、怪力の大井子です。伝説によると、大井子が村人と田畑へ引く水について争った際、村人は大井子を女性と侮り、水田の水を止めてしまいました。大井子はその夜、仕返し村人の田に巨大な石で水をせき止めてしまうのです。その後、村人たちは岩を動かさず、大井子に謝ります。すると、大井子はいとも簡単にその岩を動かしたといわれています。

他にも「東海道張交図会」の図柄には、描かれた背景を知ると面白い逸話や伝承があります。一枚で幾つもの宿場にまつわる図柄が楽しめるシリーズです。



二代目オニカゲ学芸員のページ① 「洋画家が見た浮世絵」

初めまして。先代からONIKAGE学芸員を引き継ぎ、このコーナーを担当する二代目オニカゲ学芸員です！ 今年の4月から藤澤浮世絵館に勤務し、藤澤や浮世絵について勉強の毎日。駆け出し学芸員としてあらゆることを調べる中で、「これは面白い！」と思った色んなことを皆さまに紹介します。

記念すべき第一回目として取り上げるのは、洋画家の岸田劉生(1891~1929)。劉生といえば、「麗子像」！ 美術の教科書で見たことがある人も多いと思います。溺愛していた自分の娘をモデルにしたとされる作品ですが、独特なタッチに思わずぎょっとした人もいます。

さて、劉生は38歳という若さで亡くなる夭折の画家として知られていますが、実は短い生涯の中で、療養のため藤澤に住んでいた時期がありました。劉生は洋画家ですが、日本の美術にも深い関心を持っていて、特に浮世絵は自身も収集も行い、評論本も

2冊刊行しています(うち、1冊は劉生没後からだいぶ経った後に刊行)。今回は、劉生が浮世絵についてどう思っていたのか、歌川広重を例に紹介したいと思います。

劉生は広重のことを称賛しています。あらゆる浮世絵師の中でも「最大巨匠の1人」と考えており、「日本の風景、風土を活かし、絵の中で心が生きている」と大絶賛しているのです。具体的に「東海道五拾三次之内 藤澤」(保永堂版)(※この作品は当館も所蔵しています!)を例に挙げ、次のように述べています。

「私は東海道藤澤の近くに住んだことがあるが、彼の描いた藤澤の宿の絵をみて、今日はまったく形が変わっているのかかわらず、その地方のにおいともいふべき、一種の感じが出ているのに驚いたことがあった。」

(岸田劉生『繪入浮世絵板画の画工たち』より引用)

時代が変化し、その街並みの中に浮世絵で描かれた面影がなくなっても、劉生が見た藤澤の景色には広重作品と似たような雰囲気を感じられると述べています。劉生が住んでいた頃の鶴沼は、のどかな田舎風景が広がるのんびりとした場所で、劉生は浮世絵から醸し出される、穏やかな当時の藤澤宿の空気を感じ取ったのかもしれませんが。

このように広重を大絶賛した劉生ですが、全ての浮世絵師を称賛していたわけではありません。例えば、葛飾北斎をあまり評価していなかったのは実に興味深いポイントです。「世間は北斎に対して過大評価しすぎではないか」と批判し、生きていた時代や絵の方向性は違えど、同じ絵描きとして辛口な意見を評論に書き連ねています。

劉生は、他にも中国絵画に興味があったようです。様々な分野の美術の収集・見聞を広めたことで、自身の画風にも大きな影響がありました。実は、浮世絵から着想を得た作品もあるんです！ 明治以降に西洋から新しく入ってきた洋画に、浮世絵という視点を取り入れた劉生。そんな彼の作品に思いを馳せつつ、浮世絵を鑑賞するのもおもしろいですね！



浮世絵のぼれ話 09



葛飾北斎「富士三十六景 相州七里浜」

2020年のパスポートの査証欄のデザインに葛飾北斎の富士三十六景シリーズが採用されました。シリーズ全46図のうち5年用には12図、10年用には24図が採用されており、今回展示している「富士三十六景 相州七里浜」は、10年用パスポートの中で確認することができます。

この富士三十六景シリーズは輸入品のベロ藍を使うことを特に重要視していたことがわかっており、本図もほとんどが藍色になっています。ベロ藍はベルリン藍を略したもので、ベルリン藍の名前の由来はプロイセン王国(現在のドイツ)の首都ベルリン。この藍が発見された土地です。日本には延享4年(1747)に輸入されたといわれています。

パスポート査証欄の大幅なデザイン変更は1992年以来、実に28年ぶりとのこと。日本で初めてパスポート(当時は海外渡航文書と呼ばれていました)が発給されたのは慶応2年(1866)と江戸時代末期の頃なので、そこから154年の時を経て、江戸時代に制作された浮世絵が採用されたと思うと感慨深いものがありますね。

編集後記

日本最古の物語とされる『竹取物語』にも富士山は登場します。月へ帰るかぐや姫から渡された不老不死の秘薬を、帝は「月に近い場所」である駿河の山の頂上で燃やします。それ以来、山頂から煙が立ち上っている…という結末でした。そして、この山が富士山であると言われています。かぐや姫との別れという悲しい物語を印象づけられた富士山ですが、時代を経ながら、神秘的な霊山、または、お目出たい象徴として信仰され続け、その姿は時には威風堂々とした佇まいであり、またある時には日本の原風景と評される穏やかな姿を見せています。そのような多様な姿をみせる富士山の姿を描き捉えることは、絵師としての気概を持って臨んだ作業でもあったことでしょう。古来より現代にいたるまで人々の心を引き付ける富士山の姿を描いた作品の数々をお楽しみください。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111 【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00~19:00 (入館は18:30まで)

【休館日】月曜日(祝日、振替休日の場合は翌平日)

※その他、展示替えのために休館日がございます

【HP】[藤沢市藤澤浮世絵館](#)で検索

うきよぼれ

